

り。兵庫が没せし年月は、いまだ詳かならず。小松遺文に兵庫の判書あり。其の寫。從中納言様御鷹之塩雁一つ塩鴨一つ拜領、謹而致頂戴候。誠忝仕合、冥加至極奉存候。御前可然様被仰上可被下候。

刁九月四日

熊澤兵庫助 判

御會所衆

按ずるに、右は慶安三年なるべし。此の判書に據れば、兵庫助と稱したるか。但し寛永十六年六月金澤廻火事定書に、定火番衆と記載有候内に熊澤兵庫と有りて、兵庫助の名外に見ゆす。

○青山將監邸跡

此の邸は、熊澤兵庫の舊邸なれば、熊澤大助退去の後、青山氏の居邸と成りたるもの也。或は云ふ。青山氏は、代々越中魚津城を預り居り、廢城に付金澤へ來り、此の邸地を賜ふと。按ずるに、魚津古今記に、青山氏寛永四年に金澤へ引越すと云ふとあり。然れば初め他所にて居邸を賜はり、後爰に移轉したるなるべし。

○青山佐渡守吉次傳

吉次は青山氏の元祖にて、青山與三と稱し、越前府中に於て利長卿に奉仕し、武功に依つて追々登庸せらる。慶長三年四月廿日利家卿養老し給ひ、利長卿襲封し給ふに依つて、此の日從三位中納言に昇進し給ひ、青山與三吉次・岡嶋喜三郎一吉叙爵し、吉次は佐渡守に任じ、一吉は備中守を拜任すと、前田四代日記・菅齋錄・菅君雜錄等に見ゆ。求舊紀談にも、利長様御家老之諸大夫は、前田對馬守・青山佐渡守・片山伊賀守・太田但馬守、此の四人諸大夫に被仰付由山城申すとあり。三州志古城考に、天正十三年越中我が封内と成り、瑞龍公青山佐渡をして婦負郡城生城を守らしむ。と見え、魚津古今記に、新川郡魚津の城代は、天正年中に青山佐渡守婦負郡城生城より引越し入城也。佐渡守は初名與三、知行高一萬四千石共又一萬七千石共云ひ、内二千石與力三人有之。慶長九年利長卿富山城に隱居し給ひ、十四年三月十七日富山町出火し、城中回祿す。佐渡守父子魚津より馳せ行き、利長卿魚津城へ御移り、十月迄御座被成。同十七年六月晦日佐渡守魚津にて卒去。嫡男與三長次

家を繼ぎ、魚津城代を勤む。後豊後と云ひ、元和元年に没す。其の子豊後正次家を繼ぎ、魚津城代を勤むる處、廢城と成り、寛永四年に金澤へ引越す。といへり。

○青山將監傳話

加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。青山將監の持鎧は、虎の皮の投鞘也。此の鎧は將軍家御鎧百本の内の一本也。臨坂淡路守殿の粘の皮の投鞘は、百本の内の二本也と云ふ。或時横田傳太夫、殿中御規式の時御飾に付、兩品の御鎧の敷を算へ見しに、虎の皮は九十九本、粘の皮は九十八本有之と、石野知太夫話也。とあり。又懷惠夜話に云ふ。青山將監老後陽廣公の御前へ出られ、色々御咄有之。年寄候ては、餅給へ申事藥のよし申候間、給候やうにと御意被成、御前にて下されし處、齒無之ゆる喰切事不成。くはへ候て、引き被下候へば、永く成りて切れ候時、鼻頭へへたと付きたり。御近習の兒小姓こらえかね吹出し笑ひけり。陽廣公將監が鉢を御覽被成、落涙被遊、將監退去の後御意被成。かやうに御用にも相立候者老衰し、只今は餅さへ給へかぬ候躰に罷成ると被思召候得者、御落涙被遊なり。左やう

の心付も無之笑候事、不嗜なる儀と御叱り被遊候よし。左註に、陽廣公の尊慮、今二百年の後に承りてさへ涙を落す。ましてまのあたり此の事を承り、何れか涙を落さざらんや。といへり。

○眞宗超雲寺

東派眞宗道場也。貞享二年由來書に云ふ。東末寺寺内超雲寺、文明五年實善建立、先祖能美郡清水村に居住、寛永七年東末寺看坊を本寺より被申付、寺内在之。と記載す。按ずるに、鍛冶町長徳寺由來書にも、文明五年實善建立、元能美郡清水村に在之、後金澤へ移轉す。とありて、其の來歴全く同じ。さて、此の超雲寺は、寛永以來東末寺の地内にありしを、明治廢藩の後青山氏の邸跡へ移轉して堂宇を建立せり。

○小塚町

金澤事蹟必録に云ふ。由比氏の懷惠夜話に、樺田兵藏先祖早道の儀有之處に、屋敷は小塚町堀宗叔筋向とあり。今は宗叔町とのみ唱へて、小塚町と不云。とあり。按ずるに、小塚町の名は、小塚氏の居邸ある故に呼び初めたるなるべ